

## フィリピン研修参加報告書

京都大学大学院 文学研究科 2年 額田 聖菜

私は2013年から京都市内の中学校にてフィリピンにルーツをもつ子どもたち（Japanese Filipino Children、以下JFC）の学習支援ボランティアを行っており、今回のフィリピン訪問は私自身にとって2年ぶり4回目でした。今回の研修では、「長期的に支援すること」について特に考えました。

私にとって今回のフィリピン研修は3回目の参加でした。毎回新しいところに行くので新しい発見もある一方で、同じ場所にも訪問するので、相手との関係を深め、自身の変化を感じることができます。例えば、研修ではCommission on Filipino Overseas（政府機関）やDAWN（JFC母子を支援するNGO）、フィリピン大学に毎回訪問しています。またCFOの職員やDAWNのメンバーの訪日時には、私たちも対応しています。このように定期的に関わりを持つことで、顔の見える・名前のわかる関係になり、信頼関係ができてきたと感じています。再会のときの喜びも一入です。1度きりの訪問で終わりの関係ではなく、お互いの活動を理解し、尊敬し、「支援」という言葉を超えて、人として「関わる」ことに繋がっていると感じています。こうした経験を約3年間重ねてきたので、私は大学卒業後も、DAWNの活動に個人的に関わりたいと感じていますし、フィリピンを再訪するときにはCFOの職員さんたちに連絡するだろうと思います。

自身の中の1番の大きな変化は、フィリピンの現状を見ても感情が大きく揺れなかったことです。1回目や2回目にフィリピンを訪問した際は、フィリピン国内の顕著な経済格差に無力感や不平等感、憤りを覚え、気持ちの揺れに悩まされていました。しかし、初めて参加するメンバーと話をしているときに気付いたのですが、今回の研修では大きく気持ちが乱されることはありませんでした。「そういった事柄に無関心になった訳ではないが、フィリピンに何回も来ているうちに慣れて受け入れられるようになったのかもしれない」と、気づいた時は寂しく残念に感じました。しかし、今回初めてJFCの法的支援を行っているマリガヤハウスに訪問しソーシャルワーカーとして働く河野さんとお話を聞いて、また安里先生とお話をし、「気持ちの揺れ」は長く支援を続けていく上で必要なプロセスなのかもしれないと思うようになりました。河野さんはJFCの母親から相談を受けることが多く、「目の前で泣かれることもある」と話をしていました。そのときに「感情移入してしまいませんか。河野さんはしんどくないですか」と尋ねると、河野さんはきっぱりと「いえ、感情移入はしません。もちろん体面上は親身ですが、横にもう一人の自分が居て、客観的に話を聞いてできる支援について考えています」とおっしゃったので驚きました。河野さんは続けて、「薄情だと言われるのですが、その日に聞いた話は記録に残したあとすべて忘れずリセットすることが大事です」とおっしゃっていました。フィリピンと長く関わりを持っている安里先生も、「息の長い支援のためには、そういう割り切りは必要で、感情に流されないことが大切。全部引き受けて頑張りすぎると、変わらないフィリピンのことを嫌になってしまつて、継続的な支援は提供できない」とおっしゃっていました。フィリピンの訪問・日本でのJFCの支援を重ねてきた中で、継続的な支援のために自分が必要以上に感情を動かされなくなったのであればいいなと思いました。

今年度で修士課程を卒業し、ボランティアも卒業となります。仕事でも途上国とか関わっていくことになるかと思いますが、プライベートでも今あるつながりを大事にし、フィリピンに関わっていきたいと思っています。